

登場人物

女

二十代後半から三十代後半までに見える女。土着性がない、生活感がない、親の顔がわからない、そういつた女。荷物を持っていない。

男

二十代後半から三十代後半までに見える男。持っているものは財布と携帯電話。

夏の昼下がり。

大きな街の繁華街のなかにぼつんとある公園。人の姿はなく、鳩と雀だけが訪れる様なような場所。

もしくはどこでもない場所。

男がそこにいる。ベンチか花壇の縁に身じろぎもせず座っている。

女がやってくる。女は男とすこし距離を置いたところで、男を見ている。やがてふらりと、男に近づく。

女 聞こえる？

男、女を見る。

女 わたしの声、聞えてる？

男、頷く。

女 何してるの？

男 ……人待ちです

女 彼女？

男 はい

女は視線をそらす。男は女を気にせず座り続けている。

女、男の方に顔を戻す。

女 でもさ、じゃあ、待ち合わせはやめて、一緒に遊ばない？

男 ……すみません

女、男の隣に腰かける。

男 あの

女 彼女？

男 だから、はい

女 一途なの？彼女に

男 まあ

女 待ち合わせの時間って何分前？

男 ……

女 連絡ないの？

男 いつも結構遅れるんで

女 へえー。まあそういう考え方もあるよね。かわいい子は遅刻してきてもいいみたい
な

男 そうは思っちゃいませんですけど

女 彼女、かわいいんだ

男 まあ、普通に

女 普通に

男 なんですか

女 すごいなあーと思って。普通にかわいい彼女かあ（笑う）

男 ……

女 どうしたの？そのかわいい彼女とこれから会うんでしょう？そんな顔してちやダ
メじゃない

男、女から離れようと立ち上がる。しかし女がその腕を取る。

女 行かないでよ

男 離してください

女 （真摯に）私謝るから。ごめんなさい。お願い。捨てないで

男 （辺りを見回して）やめてください

女 やめるって何を？何をやめたらあなたここにいてくれる？

男 手を離してください。一体何なんですか

女 一緒にいさせて。あなたの彼女が来たら消えるから。お願い。少しだけここにいさ
せて

女、泣き出す。

男、無理に女を振りほどくことをやめる。

女 どこにも行かない？

男 ……彼女、待たなきゃなんないし

女、ケタケタと笑い出す。

女 冗談。冗談だよ

男 （手を振り払おうとする）

女 (挿んで) ダメだよ。言ったよね、ここにいるって。ねえ、お兄さんが座らなきゃ離してあげないよ？

男、腹立たしげに座る。

女 そうそう。手えないでるとこなんか、彼女に見られたくないもんね。彼女が誤解しちゃう。ああ、お兄さんは誤解されたかったか？

男 離せよ

女 ごめんごめん。お兄さんはいい人だから、安心して手を離せるよ。この手が離てもお兄さんはどこへも行かないね。どこへも行かずに彼女を待つね。お兄さんは、約束を守る人だから

女、もったいぶって手を離す。

男、慚然として手を払う。

女 まだ怒ってる

男 からかうんなら、他の男をつかまえてくれないかな

女 嫌

男 ……

女 妙なのに引つかかっちゃったねえ

男 (携帯電話を取り出す)

女 彼女、遅いね

男 (携帯電話を見ずにしまう)

女 いつもそうなんだっけ？ごめんね、焦らすようなこと言って

男 別に

女 ねえ、やっぱりあたしと遊ばない？

男 いいです

女 千円だよ

男 何が？

女 だから、あたし。千円

男 ……

女 それならお兄さんにも買えるでしょう？

男 いい加減にしてください

女 千円も出せないの？

男 そうじゃなくて――

女、男の後ろポケットから財布を抜き取る。

女（中を見ながら）いくらサービス業でも、そうまけてあげることにはできないんだよね。そうしたら本当にサービスになっちゃうじゃない？あたしサービスって言葉嫌いだからさ……（財布の中身に驚く。）

男なにやっつてんですか（財布を奪い返す）

女ねえ、それっていくらあるの？

男（急いで財布をしまう）

女すごいじゃん。全部万札

男……

女いつもそんなくらい持つてるの？それ五十万くらい？

男そんなにないです。二十二万

女十分な額だよ。二十二万円持ち歩いてる人なんてそうそういないよ

男俺だって、いつもは持ってませんよ

女ふーん

男なにか？

女二十二万も持って、彼女とデートかあ

男それが、なにか

女いやあ？えっちなーと思って

男勘違いしないでくださいよ？

女してないしてない。きつちりちようど、ジャストサイズでお兄さんのことは理解してるよ。（にやりと）やるねえ

男……勘違いしてますよ

女失礼だったね。二十二万の彼女の前では、千円の女なんか、ねえ？

男……本当に千円なんですか

女うん。ぼつきり

男安すぎる

女あら

男日本人の立ちんぼの値段じゃないですよ

女下世話なこと言わないの。そういうこと言わないのがお兄さんのいいところなんだから

男君は何なの

女、男の膝に手をのせる。

女 知りたいの？

男 (身体を引きつつ) ホテルに行かなくてもいいなら

女 (急に悲しげに) あたしじゃ不満なの

男 え？

女 (快活に) 冗談。えーと、私。私とは何か、ずいぶんとテツガクのだね。私とは……何だろう？

男 ……聞かれても困るんですけど

女 こーゆーぼやっとした質問って答えにくいなあ。お兄さん、もっと初歩的なところから攻めてくれない？

男 初歩的って

女 男と女が出会ったら、まず聞くことがあるでしょう？

男 ……じゃあ、名前とか

女 (苦笑) ぼんくら

男 え

女 なんて、名前？

男 他に聞くこともないんで

女 あるよ。いっぱいある。名前なんてお兄さん、最悪だよ。ここで裸になれって言っているのとおんなじ。恥ずかしいよ

女、からかうように笑っている。

男 知られちゃ困るの

女 ん？

男 知られたくないなら。聞きたくないから

女 ……一文字、一万円払うなら教えてあげる
男 は？

女 例えば私が夏目雅子だったら、ちがうけど、だったとしたら、なーつーめーまーさーこーで六万円。武者小路実篤だったらむーしーやーのーこーうーじーさーねーあーつーで十一万円。みたいな

男 金取るの？

女 うん

男 なんて

女 情報社会ですもの

男 ぼったくりだろ。一文字一万って

女 民話とか伝説とかにあるじゃない。いたずらばっかりする小鬼とか、お化けがいて、自分の名前を言い当てられると、やっつけられちゃうっていうやつ

男 君は――

女 ちがうけど。え。やだ。鬼に見える？
男 見える
女 え
男 嘘だよ
女 ……他にないの？
男 他って
女 知りたいこと。他ならいいよ。一文字じゃなくて、丸ごと一つ、一万円で教えてあげる
男 金は取るんだ
女 だって、秘密だから
男 秘密なの
女 秘密って聞くと知りたいでしょ
男 君のことを？俺が？
女 気になるでしょう。隠しておけば。それが例えば初恋の人の名前とか、いま頭の中のかゆい部分であっても

短い間。

男 一つ一万円？
女 まあだいたいはね
男 身体は千円のくせに？
女 おかしいって？
男 割に合わない
女 お兄さん。安いっていうのは、素性が知れないってことだから。豚肉と一緒に
男 じゃあ質が悪いんだ
女 失礼。活きはいいいし、毛並みもいいいし、こんなことは本当は言いたくないんだけど、何の病気も持ってない……。あ、二万円

女、金を請求するために男に手をのばす。

男 ……
女 「活きがいい」と「病気を持ってない」。一つで二万円
男 自分で言ったよね
女 「毛並みがいい」はいいや。見ればわかるもの
男 いや、自分で言ったよ？
女 知られたくなかったわ

男 嘘だ

女 (真面目に) お兄さんには、知ってほしくなかった

男 だから――

女 忘れて！お願いだから。私のことなんて脳髓から消し去って。どうしよう、ねえ、どうすりゃいいの？私を、誰の目にも触れないように、守りたいの。いまここに穴を掘って、私自身を埋めちゃえばいいのかしら。お兄さん、なにかアイデアがある？人の目をくらませる方法、何か知ってる？

男、女の勢いに気圧されている。

男 君が、自分で言ったんだ

女 ……ほんくら

男 え？

女 ううん。ほら。お兄さん。お兄さんはもう情報手に入れちゃったんだから。お金払って。ほら。ケチケチしないで

男 嫌だよ。何なんだよ

女 あたしだってただは嫌

男 この金は必要なんだ

女 彼女に貢ぐのに？

男 違う！

女 じゃあ何に使うの

男 え……

女 (笑って) ねえ。でも「活きがいい」と「病気を持ってない」、必要だったでしょ？

お兄さん

男 いらぬ。俺は君とは寝ない

女 うわ。小説みたいなセリフ

男 馬鹿にしてろよ

女 賞賛しただけよ。褒めてんの。ステキなセリフね。表情やしぐさもとってもよかった

男 ……(いらついている)

女 また怒った。お兄さんは褒めても腹が立つんだね。(内緒話のように) サービスしないで「活きがいい」っていうのはなしにしてあげる。あたしの主観で決めることでもないしね。普段はこんなことしないんだから。お兄さんだけ。特別

男 それでも、タダで一万円巻き上げられる

女 タダだなんて。本当に病気じゃないのに

男 嘘を教えることもあるの？

女 さあ……どうだろう……

男、財布から一万円札を取り出して、女に差し出す。

男 これ

女 はい。一万円、確かにいただきました

女、ポケットに一万円札をしまう。(一枚目)

男 それでもうどこかに行ってくれないかな

女 彼女が来るまでって約束だよ、お兄さん

男 金は渡した

女 (ポケットをたたいて) これは情報に対するお代。あたし、お金なんかじゃ追っ払われないよ

男、また財布を出す。

男 じゃあもう一万渡すから、消えてくれ

一万円札を取り出し、女の手の近くに差し出す。

女 あらあら

男 彼女が来るんだ

女 ダメだよ、お兄さん。そんなほいほいお金を出しちゃ。もしかしてお兄さん、お坊ちゃん？坊ちゃまって呼ぼうか、これから

男 普通だよ。もうやめろよ。普通の、男だ

女 普通だなんて、ご謙遜を

男 普通じゃないのは君だ

女 あら。普通か普通じゃないか知りたい？

男 それでまた金を取るの

女 お兄さんが知りたいならね

男 いいから。この金持ってどっか行けよ

女 何か教えたら(金を)ちゃんと貰う口実になるのに

男 いいだろ。ちゃんとした女じゃないんだから

女 ちゃんとした女かどうか教えましょうか？

男 本当にもう、一人にして欲しいんだよ

女 ……お兄さん、出したお金を引っ込めるの苦手そうだね

男 ……

女 でも、お金貰っておいてなんにもなしてわけにはいかないしなあ

男 (落胆して) なんで――

女 そうだ。じゃあ聞いて、お兄さん。大丈夫。楽しい話。楽しい話だよ。すぐ終わる。

(一万円札を受け取って) この分なんだから、聞かなきゃ損だよ

女、ポケットに一万円札をしまう。(二枚目)

男は諦めたように、女の話聞くために座る。

女 一万円分って思うと気合が入るね。……何話そっか？

男 楽しい話って――

女 そうだよ、楽しい話！何があったかなあ。人生に楽しいことなんかあったかなあ

男 ないの

女 冗談だよ。お兄さんはせっかち。(考えて)お客さんの話にしよっか。これならタダ

だし、もれなく楽しいから

男 いいの、そんな話して

女 私、顧客情報は垂れ流しなのよ

男 自分は一つ一万円のくせに？

女 そうだよ！一万円分の話しなきゃ。ダメだね、あたし。バカだからすぐ忘れちゃう。

お客さんの話なんてまとめても一円にもなんないよ

男 なんでもいいんだけど

女 お兄さんに損させたくないの

男 いいよ。もうしてるから

女 なんで一万円出しちゃったの？

男 俺は何のためにここにいるの？

女 一万円を取り戻すためだよ。情報でね。私の個人情報で。そうして私を黙らせて、お兄さんは平穩に彼女を待つんだよ。(男に) 腹が立ったならもつと怒ったほうがいいよ

男 ご忠告をどうも。早くその情報をしゃべって消えてくれ

女 あら

男 それに君からアドバイスなんてもらいたくない

女 あらあらあら

男 なんだよ

女 いいえ。お兄さんはなかなか正直。正直な人は好き。(天気の話でもするように)
私ね、お兄さん、昨日出て行けって言われたの

男 誰に
女 身長169センチくらいの禿げたおじさんに
男 ……だれ
女 音楽が好きなんだった。いっつも騒音みたいにクラシックを流してた。若い頃は頭の中身がモーツァルトだったんだって。わかる？お兄さん。頭の中身のことなの。若かりし頃の自分はモーツァルトの音楽のように華やかで親しみやすくインスピレーションに溢れてたって、そう言いたいのよ
男 はあ
女 最近は何ートーベン。頭の中がベートーベンの音楽のように暗くて壮大でインテリジェンスなんだって。恥ずかしいよね。だから言ったの。そんなたとえで楽しいのはおじさんだけよって。そうしたら「でも君みたいな美大出のお嬢さんはこういうの好きでしょう」って
男 美大出身なの
女 (首を横に振って) そんな嘘つかなかった
男 違うんだ
女 くだらないでしょ？
男 どうなんだろうね
女 お兄さんはくだらないって思ってるでしょう？
男 ……君は、そう思ってるの
女 お金はいっぱい買ってくれた。いっばい買ってくれた。隅から隅まで全部知ろうとした。楽しんできた。私、本当は知られたくないんだけどね。あのおじさんは余興でやってるんだなあってわかったから、きつとすぐ忘れてくれるだろうって。実際すぐに忘れたし。私の子供のころの話とか、同じクラスの女の子、血がでるまで許さなかった話とか、手え叩いて喜んでたのにあっという間に忘れちゃって
男 血がでるまで？
女 私が遊びに行くとお人形がなくなるって言いふらされたの
男 それで血祭り？
女 シャープペンシルぶっ刺してやった。小学校の昼休みにね。手の甲を、ぐさって。でもそれだけ。すっごい嫌な女だったんだけど、血の色みたら気が落ち着いちちゃって、こいっつも痛い目をみた、痛い思いをした、だからいいって思って、やめたの
男 溜飲が下がった
女 ホント嫌な子だったんだよ、人のこと仲間外れにしてさ。お人形あんなに持っているのに、ちよっとくらい持ってったからって何よ
男 え
女 だってすっごいっばいあって、着せ替えのお洋服もいっばいあって、私だって女の子だったから、それは欲しいよ。ポケットぎゅーぎゅーにしたよ。いっばいのお人

形とお洋服で、ポケットはちきれそうだったよ
男 完全に君が悪いんじゃないか。相手もシャーペンぶっ刺されていい迷惑——
女 (反論するように) でも私、お人形をポケットに入れてもそれを自分の部屋に持ち
帰るようなまねはしなかった。全部帰り道にどぶに捨ててた
男 君が悪いのに変わりはないと思うけど
女 そうね……
男 どうしたの
女 許してほしいわ
男 僕に？
女 あなたじゃない

間。

男 手紙でも書いたら？ごめんなさいって。向こうだってもう大人になってるよ
女 嫌。あんな女、謝ったらこっちの女が下がるわ
男 さっきと言ってることがちがう
女 そうね。私、頭がおかしいから
男 話もころころ変わるし
女 そうね。どう思った？今の
男 どっからどこまでが一万円なの？
女 ……どこだろ
男 ……モーツアルトに、捨てられたの？
女 ー？
男 捨てられたんだ
女 (笑う)
男 悲しくはないの？
女 悲しいよ。あんなに喜んでくれたのに。何がいけなかったんだろ
男 ……おしまい？

女、男に一万円を差し出す。

女 やっぱこれ返す
男 いいよ
女 私ね、お金を筆ろうってわけじゃないんだよ
男 今更何言ってるんだよ
女 本当に

男 本当？
女 本当だよ

間。

男 男に捨てられたの

女 お客さんにね

男 特定のお客さんだったんじゃないの

女 そんなことない

男 でも、捨てられたんだ

女 うん

男 悲しいんだ

女 (頷く)

男 それで十分だよ。一万円は

女 ……好きなもの

男 ん？

女 私の好きなもの、今から言うから聞いてて

男 だからいいって

女 お願い

男 帰れよ。ああ、金か？いくら欲しい

女 欲しくない！

男 じゃあ帰ればいい。いくら欲しいんだよ！

女 いらない！

男 嘘をつくな！

女 (半泣き) だって、知って欲しいんだもん

男 「だもん」？

女 夜更かしと早起き。朝食をがつつり食べることに。人の親切を無碍にすること

男 勝手に進めんなよ

女 親子丼が好き。正直な人が好き。月並みだけどサンテグデュペリ。悔しいけど『赤毛のアン』

男 なんでそんな自分勝手に――

女 これを私の名刺だと思って。お兄さん、私ね、もしこれから引越すことがあったら、どこか親切な場所が見つかったらだけど、そうしたら引越し前に石焼き芋の車をレンタルして、拡声器のボリューム、がんつがんに上げて、町内一周しながらこれを言いたい。ついでにお芋も配れるし。あ、焼き芋は鳴門金時が好き

男 聞いてない

女 うるさいのは嫌い。静かなのが好き。でもデイズニーランドも好き。トゥーンタウンのミッキーの家に三十分いたことがあるんだよ。すごい空いてたの。お兄さん、デイズニー嫌いでしょ

男 え、別に――

女 倒錯した人間関係が好きよ。お母さんが好き。春に散った桜を踏みしめるのが好き。秋の終わりの銀杏臭い並木道も。お兄さんは？

男 考えたことない

女 そうよね。お兄さんは彼女のことと頭がいっぱい。(一呼吸して大声で) ハッピーなミュージカルが好きで、フレッド・アステアって知ってる？知らないか。昔のアメリカのミュージカルの人なんだけど、私、あの人と結婚したいってずっと思ってた。それからバス停も好きで、バス停でいつか恋に落ちる予定。雨でなかなかバスの来ない日に、できたらアステアとね。こんなこと言ってる空に笑われそうだけど。(笑って) 少女趣味。ひどい少女趣味。でもね、少女趣味って言われるのは好き。後は、スリッパ。スリッパがすごく好き

男 ……俺はどうしたらいいの

女 聞いてればいいの。お金は取らないんだから

男 どうして

女 知ってほしくて

男 どうして

女 だって。(考えて) 間違えられる嫌だもん

男 また「だもん」

女 お兄さん、私のこと全然知らないじゃない

男 俺が君のことを知る必要があるの

女、男を見つめる。

男 俺は君を買う気はない。できれば、何度も言うけど早く帰ってほしい。それでたぶんもう二度と会わない。だから――

女 彼女、遅いよ

男 なんだよ、それ。…怒ったの

女 (首を振って) 間違えてるよ、お兄さん。お兄さんも間違えてる。みんな間違えるんだよね。私に何を言えればいいのか、私の前で何を褒めるべきなのか、私が欲しいものは何か。間違えて気の利かないことばかり平気で言って、余計なことばかりして、みんなひどいから

男 そりゃあそんな風に、人は君の思い通りにならないよ

女 気の利かない人に会うと寂しくなる

男 それ、俺のこと？

女 みんなが私ならいいのに。姿は違っても、私ならいいのに。生まれ持った素質とか、今までの生きてきての経験とか、それぞれ違うのはわかるけど。違う私で、見かけも中身も違うけど私で、いてほしい。じゃないと楽しくおしゃべりもできない

男 ……なんとなくわかるけどさ。それは無理だよ

女 何がわかるの

男 人はそれぞれ違うんだから

女 だから違う私に――

男 君一人甘やかされようだなんて許さないよ

女 え？

男 (穏やかに) みんなが君の好みを把握して、君の真似っこをして、君をちやほやする。それがお望みのようだけど、でも君はそんなことされるような大層な人間じゃない

女 ……

男 もちろん君だけじゃない。そんな風にされていい人なんてどこにもいない。だから世の中が君に親切じゃないからって、駄々をこねるな

女 駄々

男 君の言ってるのは子どもみたいな我侷だよ。それに君のコピーで溢れている世界なんてつまらないでしょ。世界中が均一に君だなんて

女 私、つまらない？

男 いや、君がつまらないってことじゃなくて、世界中みんな君だとはつまらない――

女 じゃあ私は面白い？

男 ……そういう、すり替えはやめてくれない？

女 (男にしがみついて) 私といると楽しい？

男 離せ

女 私の初恋の人の名前、教えてあげようか

男 (ひるんで) やめろよ

女 相原健太くん。まだ幼稚園だった

女、言うと同時に手のひらを出す。

男は動かない。

男 黙れ

女 すっごい好きだった

男、動かない。

男 だれがそんなことに金を払う？

女 (まくしたてるように) 好きだった。大好きだった。あのころの私のすべて。毎日意地悪して泣かせてた。他の女の子と目を合わせただけで許さなかった。お母さんにだって焼きもちやいた

男、女の口を塞ぐために、財布を取り出し一万円札を出す。

女 その次に好きになったのは渡辺弘明くん。小学校六年生のとき。つまりそれまでずっと相原くんのが好きだったの

女、一万円を受け取って、またゆっくりと手を出す。(三枚目)

男 は？

女 渡辺君もステキだった。手先が器用で、半年かけて作ったお城の模型をプレゼントしてくれた

男、一万円を出す。女、当然のようにそれを受け取る。(四枚目)

女 それから駆け落ちした相手がいる。中嶋早紀ちゃん

男 もうやめろよ！……女の子？

女 中学校の同級生でね。学校が好きじゃなくなって二人で逃げたの。公園の障害者用トイレをねぐらにしてちよっとだけど生活して。でも、やっぱり臭いし水っぽいし、嫌だったんだね。三日目だったな、早紀が交番に行ったの(手を出す)

男 ……(一万円出す)
女 (一万円を受け取る)でも私も嫌だった。あの子があんな泣き虫だなんて知らなかったし

男 ……次は高校の話？

女 うん。どつきどきの発情期

男 どうして駆け落ちなんてしたの

女 ……中嶋早紀？

男 うん

女 それ、質問？

男 ……うん

女 中学生だったからね、熱烈だったんだよ。そりゃあ駆け落ちぐらい、ね。これ、答になるかな？

男、更に一万円を出して女に手渡す。(五枚目)

女 でも私、早紀以外の人たちも本当に好きだったよ。お兄さんがもうすぐ来る彼女を好きみに

男 そう

女 ねえ、彼女ってどんな人？

男 黙秘権

女 ケチ

男 そのケチがもう六万取られた

女 返そうか？

男 いいよ

女 どうして払っちゃったの

男 君が、払えって言うから

女 お兄さん、ちよろすぎるよ

男 ……

女 寝ないよ

男 わかってる

女 千円くれれば寝るけど

男 いらない

女 それはそれで傷つく

男 いいから、すこし黙ってくれ

女 ……

男 可哀想だと思ったんだ。たぶん

女 私を？

男 君を

女 やめてよ。憐れみなら他の女にあげて

間。

女 ……このまま、彼女が来なかったら、どうする？

男 来るよ

女 だけでもし来なかったらどうする？残り十七万もかかえてさ

男 (笑って) 君と百七十回はできないな

女 (笑って) 彼女が怒るよ？

男 どうだろう

女 怒らないの？

男 君は、普段もこんなことしてるの

女 ううん。ひたすら外で話してるなんて初めて

男 そうじゃなくて、千円でいいって言うておいて、その後自分の情報で万札かせぐの

女、面白くなさそうに手を出す。

男、一万円をのせる。(六枚目)

女 千円でオツケーってお客さん、少ないんだよね

男 そりゃあ、どんな女かわかったもんじゃなしね

女 (金をしまいつつ) 病気移されても困るしね

男 だろうね

女 お兄さん野暮だね

男 うん

女 とても文学部だったとは思えない

男 文学部ではなかったよ

女 文学やってる男はみんなそう言うんだって。だからこの世のどこにも文学部の男は見当たらない

男 経済学部だった

女 嘘ばかり

男 ……彼女が来なかったら

女 ン？

男 (自嘲気味に笑って) 遅いから。来なかったら

女 うん

男 それでもここで待ち続けるんだと思う

間。

女 ……気持ち悪い

男 だよね

女 信じてるのね

男 疑ったつてしようがないでしょう

女 じゃあ何で来ないの？ねえ……

男 事故とか？

女 都合よく、電車のダイヤが乱れたつて？

男 家を出るとき、急に親から電話がかかってきた

女 それでまだ電話中なの？
男 バスで寝過ごした。コンタクトレンズを落とした。迷子の子どもを見失ってしまった。
酔っ払いにからまれて道を引き返した
女 お兄さん、馬鹿なんじゃないの？
男 来るよ、彼女は

女、楽しくなさそうに男を見ている。

女 まるでこの世に女は彼女だけみたい
男 そういわけじゃないけど
女 名前、なんていうの
男 僕？
女 彼女よ
男 (女に耳打ち)
女 普通ね
男 まあ——
女 普通よ。とても普通。普通の、ただの女よ、彼女だって
男 君の名前はなに

女、男の頬を張る。

女 ごめんなさい
男 いや
女 ごめんなさい。そうよね。彼女は普通で、だからお兄さんだってかわいいのよね
男 (女を見つめながら) 普通よりちよつときれいだ
女 はいはい
男 あと普通より、性格もいい
女 そうなんでしようよ
男 変な声をしている。カエルみたいな
女 そこも気に入ってるのね
男 一緒にいて落ち着くし、話も合うんだ
女 大変結構
男 世の中の人間の九割が興味ない話、ちがうな、九割九分八厘が聞きたくもないような話、僕が本当にした話に、にこにこ笑いながら相槌を打ってくれるんだ
女 奇跡のような子ね
男 君の名前はなに？

女は答えない。

女 お兄さん……本気で思ってるわけじゃないわよね。私が小鬼とか、化け物で、名前を呼ばれたら死んじゃうって

男 死ぬの？

女 死なないわよ

男 じゃあ何で言わないの

女 お兄さんが損するからよ。そう。わたしの名前って長い。ブラジル人みたいになつがいの！お兄さん、何十万も払いたくないでしょう？

男 (笑って) そんなに？

女 (怯えたように) やめてよ。笑わないで。私のことを子ども扱いしないで。ちゃんと見つめて。ちゃんと愛して。(男に触れて) 私だけってそう言っ。みんなと一緒にはしないで

男 僕はその人じゃないと思う

女 だけとお兄さん。ねえ、優しいお兄さん。彼女はいないんだから、彼女がくるまでの間だけ、私のことも思っ

男 思っ

女 疑ったことないの？彼女を。他の男を好きかもしれない

男 疑ったっでしょうがない

女 遊びかもしれない。彼女はお兄さんのものじゃないかも

男 それでも。こんなこと言いたくないけど。僕が、彼女のものだ

女 あなた、女みたい！

男 男女差別だ

女 くだらないわ。私を見て！

男 どこを！

女 私よ！ここよ。生きてるのよ！無視しないで。私を知って！

男と女、お互いを見ている。

男 聞いていい？

女 なにを

男 名前

女 (間髪入れずに) 私できるなら私と話がしたい。お兄さんじゃなくて

男 そう

女 気の利かないお兄さんじゃなくてね

男 うん
女 こんな、女に騙されるためにひよこひよこ二十二万持って出てきた人しかないな
んて
男 俺が彼女を呼んだんだよ
女 ああ。だから来ないんだ
男 来るよ。来るに決まってる
女 もちろんそうでしょうよ。何時間でも待てばいいんだわ
男 年はいくつ？
女 ……え？
男 聞いているの。君、年は？
女 ……〇〇（虚構の年齢）。〇〇年（干支）
男 誕生日は？
女 〇月〇日（虚構の誕生日）。〇〇座（星座）
男 将来の夢ってなに？
女 （くすぐったそうに）将来の夢？
男 うん
女 （笑う）
男 何がおかしいの
女 だって
男 おかしくないよ
女 おかしいよ。だって、将来って、いつ？
男 いつかな。いつでもいいんだけど
女 小さい頃の私に聞いたら、今のお前だって言うね
男 小さい頃の僕もそうだと思う
女 ないよ、夢
男 何になりたい？
女 だから、ない
男 でもこれから年を取る。四十になる、五十になる、六十になる……
女 未来なんて想像できない

二人の間の空気が緩む。

男 いま、うれしい？
女 ……そうね
男 悲しい？
女 そうね。どちらかというと……

男 言うって

女 お兄さんがこれから幸せになってもかまわないわ

和やかとも言っているような空気。

男 信仰って持ってる？

女 それなりに。すがりたい時には神さまを信じさせてもらってる

男 僕は無神論者だ

女 心が無いって書くんでしょう

男 神さまって優しいの？

女 お兄さん、彼女は優しい？

男 君の話だよ。自分のことが好き？

女 好きよ。好きじゃいけない？

男 自分のどこが好き？

女 全部。顔も身体も。何年も一緒にやってきたんだもの。大切なもの。この心も。……

私、悪い人間じゃないわ。全然悪くない

男 悪いことをしたの？

女 してない！……殺しただけ

男 ころ——

女 私を捨てるなんて駄目。駄目だったのよ、お兄さん。わかるでしょう？

殺すわ。殺したわ。あんな人、ぜんぜん好きじゃなかったもの。死んだって、許せ

ないもの

男 人を殺したの？

問。

女 人を殺したわ

男 どうして

女 わかるでしょう？

男 わからない

女 いつまで彼女を待ち続けるの？お兄さんが干からびて灰になるまで？

男 どうしてそこに彼女を持ち出すの

女 ……ごめんなさいって、言いに行くところだったの。嫌だけど、他に行くところないし

男 そう

女 でも私、ぜんぜん後悔してない

男 聞きたくない
女 嫌な感触だった。思い出したくない。思い出したくないの。死んだ人の身体は、だんだん固くなるのね。あの人の唇が硬いの。唇が。キスしたわけじゃないのよ。そんな馬鹿げたことしない。触ってみただけ。硬いの
男 それを僕に言っつて、君はどうしたいの！
女 ……お金、払っつて

男、女を見る。

沈黙。

女 あたし、いっぱい言っつたよね。教えたよね。ただっつてわけにはいかないよ、やっぱり
男 待っつて。わからない。つまり——
女 私の年齢、私の誕生日、将来の夢、だっつけ？いま嬉しいか悲しいか。私の信仰、自分のことが好きか、どこが好きか、人を殺した。(冷徹に) 八万でいいわ。払っつて警察に行くのにお金が入るの
女 ちがうわ。逃げるのよ
男 さっつきは謝りに行くっつて言っつてた
女 いいから。頂戴よ。お金
男 君はなんなんだ？
女 それ！始めにも聞いてたわね、お兄さん。私は私よ。お兄さんが見る通りよ。わかりやすく一言で説明してもらおうっつて考えがおかしいのよ
男 娼婦だ。立ちんぼで、売春婦。女で、美大出身、それは嘘で。泥棒で、少女趣味で、中学生のときにレズ。小鬼で、化け物。人殺し……

女、男のポケットから財布を取り上げる。

男 やめろよ
女 馬鹿ね。何万も失っつて、それでも私が誰かわからないんだから

女、財布から一万円札を束で取り出す。男、その手首を掴む。財布は撃ち捨てる。男と女、万札を取り合っつて揉みあう。

男 君に払う金なんて——

女 楽しかったでしょう？私がいなかったら今までの時間はぜんぶ空っつぽだったのよ
男 それとこれとは関係ない！

女 あるわ！お兄さん、怒りなさいよ！

男 もう怒ってる！

女 彼女よ。彼女によ。あなたを捨てた彼女に。腹を立てなさいよ。ぶつけなさいよ。あなたのやり方は、人間同士のものとは思えない！

男 彼女はでも来る！

女 来ないわよ！あなたと彼女のことなんて、私知らないけど、見たことないけど、でもいま来てないじゃない！

女が掴んでいた一万円札の束が、宙を舞う。

男、放心したようにそれに反応できない。

女 なんのためにこんなことしたの

男 え？

女 二十二万だって。中途半端な額持って、指輪でも買おうってことだったの？

男 え

女 ちがった？

男 (地面に散らばる札を見て) ……わからない

女、散らばる万札を集め、半分の八万を自分に、残りの八万を男に渡す。

女 婚約指輪になるといいね。お金取っちゃっておいてあれだけど

男 でも――

女 残り八万。大丈夫よ。まだまだ花束だって、指輪だって、ナイフだって買えるわ

女、この場所から去ろうとする。

男 どこへ行くの？

女 言ったでしょう？逃げるの

男 本当に殺したの？

女 嘘かもしれない

男 君は、娼婦なの？

女 わからないわ

男 どうして僕に声をかけたの

女 わからない

男と女、見つめ合う。

男は女の全体を、あるいは顔を、見る。シンパシーを持って。あるいは何らかの親しみを感じて。

女は男の目の奥を突き刺すように見る。あるいは全体を、諦めを持って眺めている。

男 君は、だれ？

二人、見つめあっている。

やがて女が目線を外す。

女 嘘よ

男 ……

女 私の言ったことは全部嘘よ。馬鹿ね、お兄さん。何万も取られて

男 嘘じゃない

女 嘘だよ

男 だから、その嘘だっていうのが嘘だよ

女 本当だよ

問。

女 あなたの彼女なら、簡単に答えるんでしょうね。きっと、何もかも本当みたいに

女、歩き出す。

男 僕たちは似てるんじゃないかな

女 馬鹿なこと言わないで

男 僕は彼女を殺すかもしれない

女 彼女はまだあなたを裏切ってない

男 ここにいない

女 来るかもしれない

男 君が言ったんじゃないか。来ないって

女 あなたは信じてたじゃない。来るって

男 だけど。だけど、じゃあなんで今いないんだよ

女 待つのよ

男 信じてたのに

女 ずっと待つの

男 君が揺さぶったんだ
女 干からびて、骨になって、ボロボロに崩れて灰になって、風に飛んで土となって、そこに花が咲くまで……

男 「捨てないで」

女 大丈夫。待つのよ

男 「別れるんだったら、殺して」

女 彼女は永遠にあなたを捨てない

男が崩れかけ、女が支える。二人、抱き合う。

女 (男を抱きしめながら) 言葉がなかったら

男 え？

女 この世に言葉がなかったらね

男 うん

女 もっと早くこうできてたかもしれない

男 うん

二人、抱き合う。

一瞬を永遠にするように。

そして、半身を裂くように分かれる。

男 行くの？

女 行くよ

男 そっか

女 うん

男 行くの？

女 うん……

女は歩き出さない。時間が流れる。

男 電話番号、教えて

女 (悲しそうに) 電話？

男、女の腕、あるいは手を捕らえる。

男 数字一つ、一万でもいい

女 本気？

男 (空いた手で財布を出して) ちょうど、八万ある

男、女を放さない。

女 ゼー――

男 (早口に) ○九〇とか○八〇はいいから。両方かけるから

女 市外局番かもしれないよ、意外と

男 いいから

女、躊躇しているのが見える。しかしその唇が動く。

女 (財布に手を伸ばして) 八、七、七、七、六

男 (女の腕を放す) 八、七、七、七、六

女 三……

女の唇が止まる。

女 あなたの名前は何？

男 え……

女 私の名前ね、○○○ (女役俳優の名) よ

女、財布を落とす。

物語が終わる。